婦人改造の基礎的考察

与謝野晶子

改造ということは最も古くして併せて最も新らしい意味を持っています。人生は歴史以前の悠遠な時代に一たび文化生活の端を開いてこのかた、全く改造に改造を重ねて進転する過程です。男子は巧みにこの過程に乗って、その個性を開展し、幾千年の間に男子本位に傾いた文化生活を築き上げました。とかくこの過程に停滞し落伍する者は女子でした。人生の幼稚な過程に動物的本能がまだ余分に勢力を振(ふる)っていた時代――腕力とそれの延長である武力と、それの変形である権力とが勢力を持っていた時代――では、すべての女性

が男性に圧制されて、従属的地位に立たねばならなかったことは、やむをえなかった歴史的事実だともいわれるでしょう。しかしこれがために女子はその人格の発展を非常に鈍らせ、かつ一方に偏せしめてしまいました。それは蜂の女王が生殖機関たることに偏した結果、それ以外には畸形的無能力者となったのに喩えても好いような状態に堕落してしまいました。『時事新報』の一記者が近頃その「財界夜話」の中で引用されたリバアブウル大学副総長の言葉の如く「国家が人民の半分だけを（即ち男子だけを）社会的、経済的、並びに公共的の業務に就かせている限り、強かるべき

はずの者（即ち女子）も弱く、富むべきはずの者（即ち女子）も貧しいのだ」という状態になったことは、女子ばかりの不幸でなく、引いて人類全体の不幸であったのです。

今は世界の女子が前後して自覚時代に入りました。今日にいう所の改造は全人類の改造を意味し、これに女子の改造の含まれていることは言うまでもありません。唯だ問題は如何に改造すれば好いかという点から始まります。

この点について、私は初めに「自我発展主義」を以

て改造の基礎条件の第一とする者です。人間の個性を予め決定的に一方へ抑圧することなく、それを欲するまま、伸びるまま、堪えるがままに、四方八方へ円満自由に発展させることが自我発展主義です。人間の個性に内具する能力は無限です。一代や二代の研究でその遺伝質が決定されるものでなく、その人の自覚及び努力と、境遇の変化とで、どんなに新しい意外な能力が突発し成長するかも知れません。ラジウムと飛行機との発明を見ただけでも、過去において予測しなかった創造能力を現代人が発揮したことに驚かれます。殊に女子はいまだ開かれざる宝庫です。過去において、

その自我発展を沮止されていただけに、男子本位の文化生活に見ることの出来なかった特異な貢献を齎すかも知れません。今日のように非戦論が勢力を持つ時代となっては、男子の腕力に代って、女子の心臓の力が大に役立つことになって行くでしょう。それはいずれにもせよ、私は実にこの新理想的見地から、旧式な良妻賢母主義にも、新しい良妻賢母主義——即ち母性中心主義——にも賛成しない者です。

　誤解されないためにいって置きますが、これまでからも私の述べている通り、私は妻たり母たることを決して軽視している者ではなく、私が私の理想の下に行

おうとする一切の事は、それが私の自我発展の具体事実としてすべて尊重し、すべて出来る限りの熱愛と、聡明な批判と、慎重な用意とを以てこれを取扱いたいと祈っています。人間の事項には殆ど同時に為し得るものと、為し得ないものと、志が余っていながら境遇その他の事情の許さないものとありますから、おのずから本末前後の関係は生じるのですが、しかしその関係は流動的のものであって、私には固定的に見ることが出来ません。例えば、私自身が大病を煩(わずら)っている場合に、私は先ずその病気を治療することに私の生活の重点を置いて、その他の事はその重点を繞(めぐ)って遠景

的に暈影（うんえい）を作るでしょう。数年前に亡くなった友人のＨ氏は、粟粒（ぞくりゅう）結核菌が大脳を冒して残酷な疼痛（とうつう）を起した時、看護していた奥さんがお子さんの事について何か相談されると、氏は悲痛な声を出して「今は子供のことなんか考えていられない。そんな場合でない。自分の苦痛で俺（おれ）は一ぱいだ。子供には健康がある」といわれました。そうしてＨ氏は二週間もその苦痛を続けた後に歿（ぼっ）せられたのですが、病院へ見舞に行き合せて氏のその悲痛な言葉を聞いた良人と私とは、一つの厳粛な人間的教訓をＨ氏から受けたということを感じました。人生はこういう突き詰めた所まで考えねば真

剣であるとはいわれないかと思います。親として最愛の子供を思っていられないほどせっぱ詰って目前の小さな自己を抱かねばならない場合もあるのです。人情の真実に徹しない人たちは、このH氏の場合を見て「子の愛の浅い親よ」というでしょう。私はそれに与みすることが出来ません。

H氏の例は極端なようですが、人間は平生誰れでもこれと類似した生活をしているのです。飢えた者は何よりも先ず食物を求めて、その他のことを後廻しにします。儒教では父母のある間は遠方へ旅行しないということを道徳としています。それだからといって、人

は食物中心主義とか孝道中心主義とかに一生の重点を決めてしまう訳には行きません。

三月の『婦人公論』を読むと、山田わか子女史は、私が屋外の労働や、屋外の女子参政権運動をしないのを咎(とが)めて、それらの実際運動を他の婦人に盛んに奨励しながら、私自身には常に否定しているといわれましたが、私が屋外の労働に服さないのは、それを避けるのでも否定するのでもなく、私には久しく屋内の労働を持っているからです。私は如何なる婦人に対しても、専ら屋外の労働を盛んに奨励した覚えがありません。

それと同時に、私にももし屋内の労働がなくなれば屋外の労働に進んで就きます。私は以前から述べている通り、新聞記者とも、事務員とも、女工ともなることを辞しません。また屋外の政治運動にしても、幼年期の子供をすべて小学へ送るようになれば決して辞するものでないことは、早く私の著書の中に明言しています。

ついでに申し添えます。山田女史は近頃その評論の中で、私に対して頻りにこういう類の臆断を敢てされるようですが、他人の意見を全部的に評される時には、その人の著書を一通り参照されるだけの用意を持って

頂きたいと思います。私が屋外運動をしないということに対し、更に女史が「私は子供が大切で可愛くて、とても家庭を離れる訳にはいかない。けれどお前さんたちはどうでもいいだろう。なぜこぞって屋外労働に従事しないか。なぜ政治運動に飛び出さないかと、晶子（あきこ）氏がいっているように私には思います。そして、何という不人情な事を仰（お）っしゃるだろうと思います」といわれた一節などは、余りに甚だしい無反省な物の言い方でないかと思います。私は母性保護問題について意見を異にしている山田女史とこの上論争する考えを持ちませんが、こういう女史の臆断については女史

に対して反問せずにおられません。第一に私が実際運動を「いつも否定している」とは何を証拠にいわれるのでしょうか。次に私は如何なる場合に、すべての婦人にその子女の養育を抛(なげう)ってまで屋外の労働と政治運動とに飛び出すことを奨励したでしょうか。また私の十余年間の著述の何処(どこ)に、婦人に対して「お前さんたちはどうでもいいだろう」というような愛とデリカテとを欠いた「不人情」な気分を持った発言を敢てしたでしょうか。それから「不人情」の一語は何よりも私の全人格を顚覆(てんぷく)せしめるものです。最も同情と礼意のあるべき女子と女子との意見の交換に、女史がこう

いう言葉を用いられたのは、女史の倫理的意識に省みて疚しくないだけの御自信があっての事でしょうから、私はそれを立証して頂きたいと思います。あるいはこれは私が「母性の国庫保護説」を主張される女史たちに対して「短見者流」という評語を加えたることに由って憤激されたのかも知れませんが、女史たちの主張が短見であり幻想であることは、一条忠衛氏が本年一月の『六合雑誌』で明晰に論断しておられます。女史たちが一条氏のあの議論をまだ今日まで論破されない限り「短見者流」の評語は不当でないと信じます。

筆が思わず側道へ入りました。山田女史が右のよう

に私を非難されたのは「与謝野晶子もまた家庭が主で、文筆を持っての社会的奉仕は副産物でないか」といって、女史たちの母性中心説へ引付けられるつもりでしょうが、私も時に或事件に対しては——従来も言っているように——家庭を主とする場合があるのは事実です。即ち「妻は病床に臥して子は飢に泣く」というような場合、家庭に大病人がある場合、そうして私の現在のように、大家族を擁して、夫妻ともどもそれの物質的供給に追われると共に、今暫く手の離せない幼年期の子供のある場合がそれです。それだからといって、私は「常に家庭を主とする」という考は少し

も持っていません。屋外の運動というような行為に対しては屋内の行為の方を主として考えねばならぬ境遇にいますが、文筆を透して実現する私の生活の上には、決して家庭を主としてはいません。例えば私が人類生活について思索している場合には、私は主として人類生活をしているのです。家庭も、国家も、その他の何事も、その時の重点となっている人類生活を取囲んで有機的に繋(つな)がっているのです。私の心理的実証を平明に述ぶればこういう外はありません。私は宗教家たちが四六時中に神や仏を持念するというような事を信じ得ない者です。いわんや女子が常に新良妻賢母主義を

中心として生活するなどという事は実際に不可能な事だと思います。言葉を換えていえば、人間は母性と母性的行為とがその全部でなく、母性と交渉しない無限の性能があり、それらの性能が発展した無限の種類の行為があるからです。例えば女子が田の植附をしたり、化学の実験をしたりする場合、それらの行為は少しも母性と関係を持たず、男女の性別を越えて、男子と共に為しつつある事です。それとも母性中心説の支持者は、田を植附ける時にも、試験管を覗く時にも、良妻賢母の意識をはっきりと持たなければならないというのでしょうか。また田を植附けたり、試験管を覗いた

りする時の女子の心理をたぐって突き詰めると、それが母性中心説へ達せねば已まないものであるというのでしょうか。

　次に私は「文化主義」を以て人間生活の理想とすることを、改造の基礎条件の第二とする者です。自我発展主義だけでは、人間の活動が動物に共通する自然的、受動的、盲目的運動の域から一歩脱して、纔かに自発的、創造的、有意的活動の端緒に就いたというだけで、まだその目的が一定しないのですが、文化主義の自覚を待って初めて自我発展主義に「眼」もしくは「魂」

を入れたということが出来ると思います。

私は文化主義について、さきに阿部次郎さんの訳述されたリップスの『倫理学の根本問題』から多く啓発せられたのですが、近頃は高田保馬さんと左右田喜一郎博士の論文とから更にいろいろの教を受けたことを茲に感謝します。

文化とは、人間が自発的、創造的、有意的の努力の結果として作り上げた事象の全体をいい、その内容としては、高田さんに従えば「一は吾人の心理的内容及びこれに伴随する動作にして、人為を待ちて成立し、従いて価値を認めらるるもの、宗教、科学、芸術、哲

学等より、言語、道徳、法律、習慣、風俗等の内容に及ぶ。他は外界の事務にして、しかも人間の努力を加えられるがために価値を有するに至れるもの、いわゆる経済的財は殆ど皆これに属する。なおこの外に第三の種類として社会組織を挙ぐべきかとも思う」といわれるものがそれです。そうしてこれらの文化内容を創造し増加することに由って、リップスのいわゆる「絶対的な道徳的、社会的、全人類的有機体即ち世界国の完成」に資することが即ち文化価値であり、この文化価値を実現する過程を文化生活といい、人間の思想と行為との一切帰趨（きすう）を文化価値に置くことを文化主義と

いうのだと思います。

人間は文化価値実現の生活に参加して、初めて完全に自然人の域を脱した人格者ということが出来ます。文化主義が最高唯一の生活理想であることは、文化内容のいずれを採って調べて見ても、その帰趨を文化主義に置かない限り徹底した解釈が附かないので解ると思います。例えば芸術のための芸術とか、良妻賢母のための良妻賢母とかでは、それの絶対価値を定めることが出来ません。芸術至上主義や母性中心主義が中途半端なものであって、到底文化生活の全体を一貫した理想の標語となりがたいのはこれがためです。芸術も、

母の行為も、学問も、政治も、あらゆる人間の活動がすべて文化主義を理想として、初めて文化生活の上に意義と価値とを持つことが出来ると思います。

次に私は「男女平等主義」と「人類無階級的連帯責任主義」とを、改造の基礎条件の第三、第四とする者です。前者については、これまでから度々（たびたび）私の感想を述べましたから、今は簡単に、男女の性別が人格の優劣の差別とはならず、人間が文化生活に参加する権利と義務の上に差別的待遇を受ける理由とはならないものであるというだけに止めて置きます。

後者は自我発展主義と、男女平等主義とに促されて起る必然の思想であって、文化生活を創造するには、すべての人間が連帯の責任を持っています。私たち女子も公平にそれを分担することを要求します。貴族と軍閥と資産階級とがこれについて階級的の特権を持つことが不法であるように、文化生活が従来のように男子本位に偏することは、文化価値実現のためにする女子の自我発展を男子の利己主義と階級思想とに由って拒むことに外ならないのです。

左右田博士が、「文化主義は、あらゆる人格が文化価値実現の過程において、それぞれ特殊固有の意義を保

持するを得、その意義においていずれかの文化所産の創造に参与する事実を通じて、各個人の絶対的自由の主張を実現し得ることを求むるものである」といわれ、また「各人格は一部的文化所産の創造に由ってその全き人格を発揚し、かくて一切の人格に由って相互に補充的かつ協働的に文化一般の意義をその窮極において顕彰し云々」といわれたのは、男女、貧富、貴賤、黄色人と白皙(はくせき)人というような差別を超えた所の無階級一律的の要求であると思います。

この男女平等主義と人類無階級的連帯責任主義との

上に立って、私たち女子も男子と等しく教育の自由、参政の自由、職業の自由等、人間の文化生活に必要な限りのすべての自由を要求します。これらの問題については、以前から他の機会でしばしば述べていますから、今は略しますが、唯だ文化主義の学者たちが女子のためにこれらの要求を奨励される一証として次にリップスの言葉を引用して置きたいと思います。

リップスは教育について言いました。「特に我らは女性に対して高等なる精神的教養を拒むべきでない。それが人間の教育である限り、それは各人の能力に従って男女の差別なくすべての人々に与えられなけれ

ばならない。精神的能力の優秀な女性は、その能力の低級な男子よりも、この教育を受くべき一層多くの道徳的権利を持っている。人間の精神的能力が開発されなければならないのは、それが男や女に属するからでなくて、それが（即ち精神的能力が）存在するからである。自己の内面から出て開発されることを望んでいる事柄であるからである。」

また女子の参政権問題について言いました。「婦人の政治的権利を承認するは、両性の差別を無視するものでなくて、いやしくも婦人もまた男子と共に人間であり、人類の一員であることを認める限り、むしろ両

性の差別がこの承認を要するのである。……婦人には婦人独特の利害と、欲求とがある。そうして国会においては、あらゆる方面の利害が代表されていることを要求するが故に、其処(そこ)には婦人もまた代表されていなければならない。……人は女性の政治的未熟を力説するかも知れない。なるほどこれは男性の平均程度に比べても一層甚だしいであろう。しかし、それならば人は女性の政治的教育に骨を折るが好いのである。」

職業の問題に対する女子の要求についてリップスの言ったことは後において引用しようと思います。

最後に私は「汎労働主義」を以て改造の基礎条件の第五とする者です。これについても私は、最近に公にした種々の感想文においてかなり多く述べていますから、茲には只だその補充として少しばかり書いて置きます。

私は労働階級の家に生れて、初等教育を受けつつあった年頃から、家業を助けてあらゆる労働に服したために「人間は働くべきものだ」ということが、私においては早くから確定の真理になっていました。私は自分の家の雇人の中に多くの勤勉な人間を見ました。また私の生れた市街の場末には農人の町があって、私

は幼年の時から其処に耕作と紡織とに勤勉な沢山の男女を見ました。私はそういう人たちの労働的精神を尊敬する余りに、人間の中にその精神から遠ざかっている人たちのあるのを見て、その怠惰を憎悪せずにいられませんでした。私はすべての人間が一様に働く日が来なければならない。働かない人たちがあるために他の人たちが余計に働き過ぎている。その働かない人たちの分までをその働き過ぎる人たちが負担させられていると思うのでした。これは私の家庭で、私と或一、二の忠実な雇人とが余りに多く働きつつあった実感から推して直観したのでした。

以前から私の主張している汎労働主義は、実にこの直観から出発して、私の半生の生活が断えず労働の過程であるために、これが益々私の内部的要求となったのですが、私のこの要求に対して学問的基礎を与えてくれた第一の恩人はトルストイです。

私は文化価値を創造する文化生活の過程は全く労働の過程であると考え、人は心的または体的に労働することに由って初めて自我の発展が出来るのですから、文化生活は労働の所産であり、人間が一様に労働するということを外にして、決して文化主義の生活は成立たないと思うのです。それで私は、すべての人間が労

働道徳の実行者となることを望み、現在のように不労所得に由って衣食する階級と、労働の報酬に由って衣食する階級との対抗をなくして、労働者ばかりの社会となることを要求しているのです。（私の近著『心頭雑草』と昨冬の『中外新論』に掲載した私の「資本と労働」の一文とを参照して下さい。）

最近に出た米田庄太郎（よねだしょうたろう）先生のいくつかの論文を読むと、今日は「労働」と「労働者」との概念が大に拡張されて「手に由りて働く生産者」の外に「脳髄に由って働く生産者」をも労働者と呼ぶ時代となりつつあるという事を教えられます。その上また三月号の『中外』

に出た米田先生の論文に由れば、現に露西亜(ロシャ)の学者ミハイロヴスキイは「人格とは労働の発現である」といい、労働する者のみが人格者と呼び得る者であるという風にいって、労働人格説を唱えていることを教えられます。私は自分の幼稚な直観が益々これらの思想に由って確実な支柱を得ることを喜びます。

私はこの汎労働主義の立場から、女子にもあらゆる労働と職業とを要求し、またそれの準備として女子の高等教育をも要求します。私が女子の学問と経済的独立について今日までしばしば意見を述べているのは、

実にこの要求を貫徹したいためです。

リップスは労働について言いました。「我らは自己の素質と、世界における我らの位地とに由って、最も実現するに適する目的にその力を集中する義務を持っている。すべての人は同一でない。故に個人がそれぞれの地位において社会的全体の中に織り込まれ、それぞれに分業を以て全体の文化的使命に貢献する」と。人間の能力が多種多様であって、適材が適所において文化価値を創造することが望ましい事である以上、個別的に適応した各種の職業が女子にも解放されねばなりません。左右田博士もいわれたように「一切の人格

が、文化価値実現の過程において、たといその中の一個でもその過程の表面以下に埋没せらるる事なく、悉く皆その表面において、それ自身固有の位置を占め」て、私のいう人類無階級的連帯責任の文化生活を実現しようとするには、職業の自由を一斉に享有することを前提としなければなりません。

世にはこれに対して沢山の反対説があります。女子の能力範囲を良妻賢母主義に局限して経済的独立の不可能をいう論者があり、また女子の現在の心理、体質、境遇だけを根拠にして労働能力の悲観的であることをいう論者があり、また女子を装飾物や玩弄物と見た男

子の迷信的感傷的感情から、女子が職業に就くことを悲惨の行為であるという論者があります。しかし最も古代からの労働的精神と労働その物とを神妙に維持している農民階級の女子を初め、屋内工業に従事している近代の女子が、今日もその母性に属する労働と共に経済的労働を並行させた立派な成績を示しているのを見れば、第一の反対説は消滅すべき運命を持っています。

平塚らいてう［#「らいてう」はママ］、山田わか両女史はその御自身の経験を基礎として、第一の反対説を唱える人たちですが、両女史が母体の経済的独立が不

可能だとされるのは、何か両女史御自身の上に、及び両女史の境遇に、それを不可能にする欠陥がありはしませんか。農民や漁民階級の労働婦人が立派に妻及び母の経済的労働を実証している事実を両女史は何と見られるのでしょうか。甚だ露骨な事をいうようですが、両女史は経済的労働を必要とする家庭にお育ちにならず、従ってそういう労働の習慣をお持ちにならないのではないのですか。

今度の戦争に由って、意外にも女子の労働能力が男子に比べて甲乙のないことが確認される機会を得ました。最早この事は多くの弁明を要しない事実ですから、

右に挙げた第二の反対説も根拠を失ったといって宜しい。第三の反対説は厳粛な文化生活の意義を解しない人々のセンチメンタリズムとして唯だ微笑して置けば好いでしょう。

女子を閨房（けいぼう）と台所とに幽閉することなく、これに職業を与える事は我国においても早くから実行されていますが、しかしその職業の範囲を男女平等主義に由って拡げることについては全く拒まれています。リップスは女子の職業を肯定して「この問題に対する一般的の解答は、すべての人はその特殊なる天性と能力とに

従って、その力に及ぶ限りの利と善とを（即ち文化価値を）この世界に造り出さなければならぬという規則である。この外に婦人の職業を決定すべき特殊なる規則の必要はない」といいました。女子にも一切の職業を解放して、女子自身の実力に応じた選択に任せたなら、そうして今日の女子を奮起させる必要上、特に職業上の自由競争を奨励するなら、山川菊栄女史のいわれたように、日本の婦人界も一人や二人の婦人理学士を珍重がるようなみすぼらしい状態には停滞していないでしょう。

リップスが「人は出たらめに婦人の能力を否定せず

に、確実なる経験にこれを決定させる必要がある。そのためには、女性にその力を試めし、その力を発展すべき機会と権利とを与えなければならない。これを開展させずに萎縮させて置く限り、女性に如何なる力が潜んでいるか、何人も知ることが出来ない。……同時に人はこの問題について、単に女性という一般概念を以て議論を進めることを避けねばならない。女性もまたいろいろである、一人の女性の天性に適しないことで、他の女性の天性に適することもまた有り得るのである」といった真理に、日本の男子も女子も深い反省を取られることを私は熱望します。

以上は甚だ粗雑な説明となりましたが、私はこの五つの条件の上に基礎を置くことに由って、初めて女子の改造が押しも押されもしない堅実性を持つと思います。これらの条件はやがて男子の改造の基礎条件ともなるものであって、女子のために特に選ばれた賢母良妻主義とか、母性中心主義とかいうようなあやふやな生活方針ではないのです。この中でも他の四つは悉（ことごと）く一つの文化主義に向って集中し、そうして文化主義は、各個人がその個性の差別に応じ、限られたる範囲に拠って、人類全体の文化価値創造の生活に参加する

意味からいえば徹底個人主義であり、人格主義であり、これに由って一切の人格が偏頗なく、依怙（えこ）なく、平等に、円満に、その生を享楽し得る意味からいえば人道主義であり、十二分に現在の人間性と社会事情とを考慮しながら、未来の飛躍の可能を信じつつ合理的の改造を志す意味からいえば新理想主義であり、新浪漫主義であると思います。（一九一九年三月七日）

（『改造』一九一九年四月）

底本：「与謝野晶子評論集」岩波文庫、岩波書店
　　１９８５（昭和60）年８月16日初版発行
　　１９９４（平成６年）年６月６日10刷発行
底本の親本：「激動の中を行く」アルス
　　１９１９（大正８）年８月初版発行
入力：Nana ohbe
校正：門田裕志
２００２年５月14日作成
２００３年５月18日修正
青空文庫ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。